

小野寺功の「いのち／大地の思想」への一考察

鳥居雅志

はじめに

二〇〇九年七月一四日に成立し、二〇一〇年七月一七日から本格実施されるに至った脳死・臓器移植改正法は、その成立までの間、そして成立してからも多くの議論を巻き起こした。その改正法が人の死の再定義を意味し得るものであったことが、その最たる原因であろう。

脳死に対する日本人の反応は、「死は科学的に特定できる瞬間の出来事であり医学的・法的に認められる確実なものであると考⁽¹⁾え」(傍点著者)られている欧米では「多くの人々がその反応の仕方を宗教や伝統文化の影響による時代錯誤的なものと考えている」⁽²⁾とマーガレット・ロックは報告している。しかしロックは、日本人の脳死の受け止め方を調べていると、「なぜ欧米では、医学による死の再定義が広く議論されることもなく

受け入れられたのか⁽³⁾」という重大な疑問を提示している。欧米人にとって死は瞬間の出来事であるのに対して、「日本人にとっては、死は瞬間の出来事ではなくプロセスなのである」⁽⁴⁾とロックは語る。また、ロックは次のように言う。「日本人にとってもっとも大切なことは、死は肉体の消滅以上のものだということである。それは何よりも、親族その他の多くの人々に関わる社会的出来事なのである。医学的に死が確認されても、家族がその死を受け入れるまでは、人は最終的に死んだことにはならない。そのために日本では、脳死患者を死者として扱うことが非常に困難なのである。さらに、遺体を損なうことに対しても、多くの人が強い抵抗感を抱いている」⁽⁵⁾。しかしロックは、こうしたことは実はそれほど特殊なことではないとし、次のように語る。

脳死体を前にしたとき、それを死んだものと考えるのは、

誰にとつても容易なことではない。生命の徴候がまだいろいろ残っているからである。「人間」を成り立たせているものが精神と脳のみであるとすれば、脳の損壊は個人の死を意味することになる。一方「人間」を成り立たせているものが体全体であるとすれば（さらに体の外にまで広がっているものであるとすれば）、脳の損壊は「人間の死」にはなり得ない。(傍点筆者)

ここで注目したいのは、「体の外にまで広がっているもの」が「人間」を成り立たせているというところである。これは「その人に関わっている人たち」によつてその人は「人間」となっている、と解釈できよう。こうした考えは、脳死を「死」とする場合の、脳を中心にした人間論とは異なつた捉え方である。例えばトゥーリーは、人は「ヒト」として生物学的生命を保持しているだけでは生存権はなく、生存権を得るにはその人が「知的活動能力」を有する「人格」でなければならぬとしているし、エンゲルハートも「社会的な意味での人格」という枠は設けているが、やはり「ヒト」としての生命の保持だけではなく、自己意識、理性、道德感覚などを備えた「人格」であることを生存権の条件としている。また、ジェイムズ・レイチェルズは「生」を生物学上の概念としての「生きること」(being alive)と伝記上の概念としての「生をもつこと」(having a life)とに区別し、「生存権を持つ資格を与える特質という点に関して、ある個体が生をもつなら、その個体には生存権がある」という

提案をしている。⁽⁸⁾これらの論では、個体による「生」の所有が人間の「生」の要件とされており、謂わば「生」が内に閉じられてしまっている。しかし、われわれにとつて「生」とは、そのように括つてしまえるものなのだろうか。「生」には個人を超えたところがあるのではないだろうか。

本稿ではこうした観点から、「いのちの思想家」であり、「西田哲学を日本的靈性の自覚の論理と捉え、そこから内発的に日本のカトリック神学の一つの可能性を追求する」⁽⁹⁾哲学者である小野寺功の「大地の思想」を見ていきたい。そしてその小野寺が共感を持つて注目する新約聖書学者にして宗教哲学者である八木誠一の「統合／フロント構造」論⁽¹⁰⁾を援用することによつて、小野寺の思想と八木の思想との橋渡しをし、小野寺の「大地の思想」の理解を深め、「いのち」への試考を行いたい。それ故、本稿は小野寺功の「いのち／大地の思想」からの一考察でもある。

一 小野寺功の「大地」

小野寺は東北岩手に生を受けた。岩手の地は、かの天才詩人宮沢賢治を産み出した地であり、細文の風吹く形而上的精神風土を形成している地であり、其處では人間や世界の苦惱連帯の意識に於いてロシアの地と深い親近性を持ち、共苦をもつて「もぞい」との呟きが発せられるような地である。小野寺はそうした風土とアニミスティックな土着思想を充分に身に宿し、その

大地にしつかりと根を張り、誠実に全身全霊をもって其處から思索を行つてゐる。^⑪

小野寺は、そうした大地を純粹に文学的に表現し得ているのが宮沢賢治であると評し、賢治の創作は「決して孤立して特異な現象なのではなく、イーハトーヴに存在し生動する普遍なもの、突発的閃光である」として、次のように言う。

この普遍的な存在の根を私は「大地性」とよんでいるが、これは最も素朴な意味では動植物がものをいう世界——いわばアニミズムの世界観といつてよいかもしれない。そしてこれを最も深い意味にとれば、あらゆる現象と経験の背後に真の「絶対」を探究しようとする激しい情熱である。イーハトーヴの深層を流れるのは、実にそのようなものであると私は思う。

意識して「いよう」といまいと、この精神風土は「原風景」として誰の心の奥にも内在しており、いたるところに素顔をのぞかせている。ただ、誰も宮沢賢治ほど奔放自在に表現することができなかっただけなのである。^⑫

小野寺の見る「あらゆる現象と経験の背後に真の『絶対』を探究しようとする激しい情熱」はまた、次のようにも語られる。

私は、賢治のこの自然交感と透明感覚を成り立たせている大地性とその宇宙感覚とを、特に重要なものと考えたい。なぜなら、ここには人間と物質、精神と対象などといった自明な近代的二元対立の思考——メルロ・ポンティのいわゆ

る「コギトの病い」——を打破する実に健康的で出入自在、統合的な場の論理と生命感がみられるからである。^⑬

このように小野寺は、賢治が「近代的自我の立場をつき破り、個を包む『いのちの場』としての世界からものを考えている」と見て取るのである。

さて、小野寺は、「近代的二元対立の思考」や「近代的自我の立場」をつき破り、「いのちの場」としての世界からものを考えている者として、賢治の他にも東北に関わりのある幾人かを挙げるが、その中で特に注目すべきとして、鈴木大拙と西田幾多郎を挙げる。

小野寺は、大拙が「日本的靈性の思想をとりあげ、それを大地性との関連で明らかにしたこと」を高く評価する。そしてそうした大拙の「大地」と表裏を成している西田の「絶対無の場所」は、「絶対と相対の交わる場、あるいはまことの神・人性の誕生の『場所』である大地的靈性の理念化の試みであり、聖靈のおいてある場所として、絶対者の自己射映点ともみられるのであ」り、「要するに大地とは、西田哲学のいう『於いてある場所』にあたり、これをキリスト教的見地でみれば、間違ひなく三位一体の神の場に相当するのである。これは同時に、神と人間（世界）との関係でいえば、『神・人性』という神と人との逆対応の場をも意味する」と小野寺は結論づける。つまり「大地とはいわば自己成立と世界成立の根底となる、人間にとって最も重要な場」なのである。^⑭

ところで、こうした大拙と西田の「大地」と、前述の賢治の

イーハトーヴ的「大地」とは、同じ「いのちの場」なのであるうか。ここまで見てきたところから両者に共通性を見出すことはできよう。また小野寺は、賢治が「小岩井農場」⁽²¹⁾という詩で述べている *der heilige Punkt* にあたるものを、西田がさらに徹底する形で *vanishing point* と表現しているとし、「西田哲学の核心をなすこの *vanishing point* の思想は、絶対者と相対者が絶対的に矛盾し相反するものでありながら、同時に決して離れることのできない統一世界を形成しているという實在の真相を、的確に表現している」と西田を評しており、ここから大拙や西田の「大地」と賢治のイーハトーヴ的「大地」とに關係があることは確かではあるのだが、しかし、両者の「大地」を同じとすることには幾らかの違和感が拭いきれないところがあるう。

小野寺自身はこの両者について次のように述べている。

私の場合、いつも「そこからそこへ」と立ち還る場所は、「三位一体の場所」としてのインマヌエル―神の場としての大地であった。そしてこの大地が、どういうわけか、私の生まれ故郷である東北の大地、宮沢賢治がイーハトーヴと呼んだあの清冽な風土と二重映しになるのである。⁽²²⁾

ここで言われている「どういうわけか」とは、実に意味深な言葉である。一体、どのように二重なのであるうか。

以下では、その二重性を読み解く鍵として、八木誠一が提唱

する「場所論的神学」の中核をなしている「統合／フロント構造」論を見ていくこととする。

二 八木誠一の「統合／フロント構造」論

八木は、われわれの本来のあり方は、「フロント構造」をなして「統合」されているあり方であるとする。以下ではフロント構造を中心に統合論について見ていくこととする。尚、これは自覚の場に於いての事柄であり、それ故に類比的な語りとなる。

フロント構造は、隣接した部屋という例えを用いながら説明すると以下のようになる。隣接した部屋AとBがあり、両部屋を隔てる壁Wが不可欠な構成要素としてある。WはAから見るとAの一部でありながら隣りにBがあるということを表出している。同様に、BにはWに於いてAがBの一部として、しかもそれがBにとってAの代表として表出している。AとBとはそれぞれ互いがなければ成立し得ない。AはAだけでAなのではなく、Bという他者とフロント（前面／前線）によって関わり合うことによってAなのである。それは恰も磁石のN極とS極が区別はできるが切り離すことはできず、互いを前提とし合うことによって初めてそれとしてあるというように、W（それぞれのフロント）という関わり（関わり／出合いの場）があるからこそ、AとBとは互いを前提としつつ各々「極」として、AはAであり得、BはBであり得るのである。こうした極と極

との関わり合いによって成り立つ構造を、八木は「フロント構造」と名付ける。勿論この極同士の連関は二つのものの間だけの事柄に限られはしない。上記の例えに用いた部屋が多角形——究極的には円——であるならば、それだけ連関は複雑になっていく。部屋の区画ですらそうであるのだから、それを「世界」に見ていくならば尚更である。

フロント構造は、次の三つに類型化される「フロント交換」という働きを為す動態的な構造である。

「実質型」…物質の授与を伴うフロント構造＝交換。例えば心では、心臓と肺とのフロント構造においては、心臓のフロントである血液を、肺の働きの構成要素として変容・同化。

「波動型」…受信器が発振器に共鳴するようなフロント構造＝交換。この「波動」の意味は、単に物理的、生物学的レベルにとどまらず、われわれの感覚や、或る思想家の思想が別の人に影響を与えるような場合も含まれる。

「フィールド型」…超越と個とのフロント構造。上記二つの水平面のフロント構造を成り立たせている垂直面のフロント構造であり、ここに於いてフロント構造が顕わになる。

われわれは互いに支え合っているという水平方向のフロント構造的關係によって有り、同時にそうしたフロント構造を成り

立たせている「場」に於いて在る。「場」という超越のフロントを宿すことによってフロント構造は、円環（八木の用語で言えば「統合体」）を成す。こうした働きをしている「統合の場」——「こうした（はたらき）である統合の場」と言った方がより適切かもしれない——を音楽を類比として用いて解説すると次のようになる。

音というのは実在するものではないが、音は他の音との區別によって一つの音として認識される。そしてそうした音たちが心という統合の場に於いて互いに調和し、まとまりを成して音楽を形成していく。心が音楽を包み込み、心の場におかれた音楽が心を表出する。心も、音楽によって形を成す。ここに心と音楽の一が見て取れる。心と音楽という二つが一つになったのではない。音楽が心の場におかれたことによって、同時に心と音楽が成り立っているのである。

このように、水平方向（極同士の関係）のフロント構造は、垂直方向（超越と個の関係）のフロント構造によって成り立っており、統合を成すように超越（「統合存在の根柢の場」）から働きかけられている。こうした（はたらき）をわれわれの「生」に見ていくならば、「われわれの（生）は、（統合存在の根柢の場のはたらき）によって生かされている」と言うことができるであろう。

さて、こうした八木の「統合／フロント構造」論をコミュニケーション論として展開している八木洋一は、論文「コミュニ

ケーシヨンの語源とその原像⁽²⁶⁾で興味深い具体例を挙げている。

それは贈与論をも含めた、「一人の少女が、慕いをよせる少年に手作りのセーターを編んで彼の誕生日に贈る」といったエピソードである⁽²⁷⁾。少女が少年に慕いをよせる。フロント構造論的には、そこで少女自身を構成するフロントとして少年を少女自身の中にも見もするし、少年を構成するフロントとして少女自身を少年の中にも見もする。少女が少年への慕いを籠めてセーターを編む。このセーターは少女の慕いが籠められているという意味で少女のフロントであり、少女の編むという仕事の成果としての作品であるという意味でも少女のフロントである。贈物としての手編みのセーターは、こうして少女を表出するフロントである。ところで、贈物は相手がいなければ贈物たり得ない。故に、贈物であるということは相手をもフロントとしているということである。そして贈物は相手に受け取ってもらふことによって贈物として成立する。少年が少女の贈物を受け取るということは、少女のフロントを少年自身を構成するフロントとして受け容れるということである。そして、少年がセーターを受け取り、少女にお礼をすることによって、ここまでで織り重なったフロントを含んだ少年のフロントが、また少女のフロントともなる。八木洋一は、このような互いに極となって関わる円環的働き⁽²⁸⁾コミュニケーションに、「八木が『フロント交換』と呼ぶダイナミックな〈生命の活動〉⁽²⁹⁾」を見る。

この例は、八木の「統合／フロント構造」の水平方向の〈は

たらき〉に重点を置いたものとして見る事が可能であろう。こうした水平方向の〈はたらき〉は、垂直方向の〈はたらき〉によっており、それ故究極的にはそれらは同じ〈はたらき〉なのではあるが、しかし同時にわれわれにとつては別の〈はたらき〉としても受け取られるのではなからうか。

三 二重の大地——「いのち」という〈はたらき〉

われわれは常に既にして共に「居／為」る。個は他とフロントによって関わり合い、フロント構造をなすことによって存在し得ている。それはフロントに於ける関わりとして何らかの行為が為されているということでもある。それは何らかの形での呼びかけから始まる。そして言葉のやりとりや、時には物のやりとりが行われることもある。そうした行為は透明なただの行為としてのみあるのではなく、恐らく何らかの〈想い〉が籠められている。八木洋一が挙げた例では、それが顕著であるに過ぎない。行為に籠められた〈想い〉。それも行為者のフロントである。そして同時に、それは相手のフロントとして相手の一部を構成する要素とも成っている。われわれは寄せられた〈想い〉を自らの一部として取り込み、それをも含めた「私」として生きていく。しかしそれは、その〈想い〉が消化・吸収され、解消されてしまったことを意味しない。例えばその〈想い〉を寄せた者は、その寄せた〈想い〉を前提として更なる〈想い〉を寄せていくだろう。また、〈想い〉を寄せられた者も、その

寄せられた〈想い〉を前提として、その相手と関わっていくことだろう。〈想い〉はこうして織り重なっていく。〈想い〉は以前の〈想い〉に織り重なっていき、行為はその織り重なった〈想い〉に導かれて為されていく。われわれは、このように互いに〈想い〉を寄せ合い、〈想い〉を織り重ね合うことによって共に「居／為」る。こうした〈はたらき〉は、「我／汝」の間に限らないだろう。いやむしろ〈想い〉は直接に働くのでない場合のことの方が多いかもしれない。〈想い〉は織り重なり、響きわたる。それは誰／何の、誰／何への〈想い〉であったかはわからない。しかし、それでも〈はたらき〉は其處に働いている。

フロント構造に於いてわれわれはわれわれとして〈想い〉を織り成していく。こうして編まれた〈想い〉によって相対者間の壁は彩られる。そうした壁は、水平方向の「大地」としてわれわれの心の奥底に宿る。その水平方向の「大地」からの〈統合へのはたらき〉は、織りなされた〈想い〉を通してわれわれに働きかける。その〈はたらき〉は究極的には「徹底すれば」垂直方向の〈はたらき〉、つまり〈統合存在の根柢の場のはたらき〉であり、西田哲学的に言えば「絶対無の場所」に於ける絶対者と相対者との絶対矛盾的自己同一的な〈はたらき〉である。

われわれは、水平方向の関係によって織り成され、編まれた「大地」に於いて、「大地」という／からの〈はたらき〉に促されて、様々なことを感受する。其處で受け取られた〈はたらき〉

は、徹底すれば垂直方向の「大地」の〈はたらき〉である。しかしこのことを逆に言えば、垂直方向の「大地」の〈はたらき〉は、水平方向の関係によって織り成され、編まれた「大地」に於いて、「大地」という／からの〈はたらき〉を通すことによって、われわれに感受されるということである。小野寺の「神そのものとしての実存的聖霊は、それ自体としては超越であり、人間の靈性に媒介されて、はじめて私たちの心の現実となる」という言葉も、そのことを語っているのではなからうか。そして賢治のイーハトーヴ的「大地」とは、そうした垂直方向の「大地」を背景にした相対者間に於ける水平方向の「大地」を表象したものでなからうか。

われわれは「絶対無の場所」としての「大地」に於いて生かされている。そして、われわれはわれわれに於いて〈想い〉によって織りなされている「大地」に生かされている。われわれが〈想い〉を籠めて関わるることによって〈いのち〉は顕在化させられる。われわれが感じとっている〈いのち〉とは、こういった〈はたらき〉に於ける〈いのち〉なのではなからうか。つまり〈いのち〉とは、われわれが関わりに於いて呼びかけ、〈想い〉を寄せ、織り重ねていくことによって生起する〈はたらき〉なのではなからうか。その〈はたらき〉は必然ではない。われわれは、われわれがわれわれであることによって、われわれによる〈想い〉によっても生かされなければならない。そしてそれ故に、そうした〈想い〉が寄せられず、生かされず、死を与

えられてしまっている者たちからは、〈想い／いのち〉を求め
る「私は此處にゐます」という無言の叫び／訴えが発せられる
こととなる。この叫び／訴えは、われわれの〈想い〉が閉じて
しまい、われわれがわれわれではなくなってしまうという
ことに対する警告でもある。小野寺が深く共感を抱く賢治の
「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得な
い」³⁰という言葉／折りも、こうした〈はたらき〉である〈想い
／いのち／大地〉からの苦悩連帯、共苦からのものであろう。
われわれは、否応なく共に「居／為」る。それは、われわれ
が、他者と〈いのち／はたらき〉を分かち合っているところに
生起し、〈想い〉を寄せ合うように共に「居／為」る、という
ことであり、つまりそれは、「われわれである」ということが〈い
のち〉であるということの意味していいよう。

われわれは、われわれであるが故に、他者の〈いのち〉を育
むよう、呼びかけ、応えるよう、共に「居／為」るように要求
されている。そうした関係に於いて〈想い〉が織り重ねられて
いくことによって顕在化する関係の〈はたらき〉である〈いの
ち／大地〉によって、われわれは生かされているのである。

おわりに

脳死に近いと思える娘のいる両親にとつて、しかしその娘は
間違いなく生きている³¹。それは、其處に織り重なった〈想い〉
によって生起している〈いのち〉が働いているからである。〈想

い〉とは、非常に陳腐で非合理的、非論理的であるように思わ
れるかもしれない。しかし、それがわれわれを生かしている重
要な〈いのち〉³²〈はたらき〉であることも、また確かなことな
のではなからうか。小野寺の「いのち／大地の思想」³³、二重の「大
地」の〈はたらき〉は、われわれにそのことを示してくれてい
るように思われる。そして、こうした〈はたらき〉を忘れてし
まった時、われわれは〈いのち〉に死が与えられてしまう状況
を平気で素通りしてしまうこととなる。それはつまり「われ
われである、〈いのち〉」を失ってしまうということ意味する
のである。

(1) マーガレット・ロック「脳死と臓器移植の医療人類学」(坂川雅子
訳)みすず書房、二〇〇四年、三頁。[Margaret Lock, *Twice
Dead: Organ Transplants and the Reinvention of Death*, University of
California Press, Berkeley, California, 2001.]

(2) 同書、六頁。

(3) 同書、三頁。

(4) 同書、七頁。

(5) 同右。

(6) 同右。

(7) マイケル・トゥーリー「嬰兒は人格を持つか」H・T・エンゲル
ハート、H・ヨナスほか「バイオエシックスの基礎—欧米の「生命
倫理」論」(加藤尚武・飯田亘之編)東海大学出版会、一九八八年、
九四—一〇頁。H・トリストラム・エンゲルハート「医学におけ
る人格の概念」同書、一九—三二頁。

(8) ジェイムズ・レイチエス「倫理学に答えはあるか—ポスト・ヒ

ユーミニズムの視点から」(古牧徳生、次田憲和訳) 世界思想社、二〇〇一年、五二—五三、八五頁。[James Rachels, *Can Ethics Provide Answers? : And Other Essays in Moral Philosophy*, Rowman & Littlefield Publishers, 1987.]

(9) 小野寺功「聖霊の神学」春風社、二〇〇三年、一三一頁。

(10) 例えば、同書、一八二—一八五頁、「大地の神学—聖霊論」行路社、一九九二年、一二八—一三〇頁(*以下、「大地の神学」と略す)。「西田哲学から聖霊神学へ—鈴木大拙の『日本の霊性』論を媒介として—」日本宗教学会「宗教研究」三六五号八四卷二輯、二〇一〇年、四七—(二五)頁。

(11) 小野寺功「大地の文学」(増補) 賢治・幾多郎・大拙「春風社、二〇〇四年、二四、三四、七五、八〇、一〇六—一〇九頁(*以下、「大地の文学」と略す)。(評論賢治・幾多郎・大拙「大地の文学」春風社、二〇〇一年)

(12) 同書、四〇頁。

(13) 同書、四〇—四一頁。

(14) 同書、五五頁。

(15) 同書、八五頁。

(16) 同書、一四八頁。

(17) 小野寺「大地の神学」六〇頁。

(18) 小野寺「大地の文学」二〇八頁。

(19) 同書、一五五頁。

(20) 宮沢賢治「小岩井農場」『宮沢賢治全集』第一巻、ちくま文庫、一九八六年、六八—一〇一頁。

(21) 同書、九八頁。

(22) 西田幾多郎「西田幾多郎全集」第一巻、岩波書店、一九八八年「第四刷」(一九四九年「初刷」)、四五—一頁。

(23) 小野寺「大地の文学」一四—一五頁。

(24) 小野寺「大地の哲学—場所的論理とキリスト教」三一書房、一九八三年、一〇五頁(*以下「大地の哲学」と略す)。

(25) 主に、八木誠「フロンティア構造の哲学—仏教とキリスト教の相互理解のために」法蔵館、一九八八年を参考。

(26) 八木洋一「コミュニケーションの語源とその原像」『四国学院大学論集』第九九号、四国学院文化学会、一九九九年三月、二五—四七頁。尚、八木誠と区別する為、八木洋一は常に姓名で記すこととする。

(27) 同論文、三四—三九頁。

(28) 同論文、三八頁。

(29) 小野寺「大地の哲学」六九頁。

(30) 宮沢賢治「農民芸術概論綱要」『宮沢賢治全集』第一〇巻、ちくま文庫、一九九五年、一八頁。

(31) 朝日新聞、二〇〇九年六月一九日朝刊、三九面。

(とりい・まさし、宗教哲学・生命倫理学、立教大学大学院)